筑紫女学園大学リポジト

A Study of TOYOSIMA-Yosio's DOUWA "Houkibosi No Hanasi"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永淵, 道彦, NAGAFUCHI, Michihiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/194

豊島与志雄童話「慧星（ほうきぼし）の話」論

――作品構成と主題について――

永淵道彦

A Study of TOYOSIMA-Yosio's DOUWA "Houkibosi No Hanasi"

Michihiko NAGAFUCHI

はじめに

豊島与志雄の童話作品中、「慧星（ほうきぼし）の話」（『赤い鳥』大正11年7月）は評価の高い作品であるが、本作品について、続橋達雄は『童話の味わい方』（明治書院刊　昭和49年9月）中で、次のように評している。

はじめ悪童物語らしいと胸をはずませて読み出したわたしは、思いがけない結びに胸がすーっとして、遠く消えていったケメトスのたいまつの火をいつまでも考えていました。これが底の浅い作品でしたら、ケメトスは改心してりっぱな人間になったというような筋の運びになるでしょうし、さもなければケメトスに対する祖父の道徳的な批判でしめくくられるかもしれません。しかし、この作品には、祖父の戒めにそむいた罰だといったような狭くるしい教訓はありません。むしろ、不吉な運命を恐れることなく、積極的に自分の生命を生ききって、はればれと美しく消えていった姿を思いますと、現実社会から解放されてひろやかな世界へと飛び立つよろこびさえ感じます。〈たいまつの光を長く尾にひきながら〉遠くはるかな夜空へ。（作者はここで、ギリシアの運命悲劇を念頭におき、それを美の世界へと転化させたのかもしれません。）

続橋の「不吉な運命を恐れることなく、積極的に自分の生命を生ききって、はればれと美しく消えていった姿」に、「現実社会から解放されてひろやかな世界へと飛び立つよろこびさえ感じる」という作品

の読みと理解は、「慧星の話」の作品評として言いえて妙であり妥当な評だと言えよう。

掲げた続橋の作品評に尽きるであろうが、本稿では、よりいっそう「慧星の話」の読みと理解とを深めるために、本作品が持つ特異な構成について考察しておくことにしたい。併せて、本作品の主題についても考えをめぐらしたい。

物語・小説の作品構成について

童話作品も小説同様、物語の範疇に入れることができるであろう。言わずもがなであるが、その要素として、主題、構成、人物、描写、文体の五つをあげることができるであろう。このうちの作品の構成について、村松定孝はその著書『文学概論』（双文社出版　昭和57・4）中で次のように述べている。掲げる村松の一文は小説の構成についてであるが、物語の範疇ということで、童話の要素とも、基本的に一致することであると言えよう。

主題が定められると、次にそれがどのような筋をともなって発展するかが、物語・小説の生命を決定する。いくら立派な主題を作者がもくろんでみても、仕組みや筋の運びが巧みに構築されていなければ、物語及び小説の体をなすことはできない。物語・小説には、さまざまな事件や人物の行為があつかわれるが、それらを結び付けるのがプロットである。最も簡単な構成形式は、はっきりと異った二つの事件を結び合わすことであって、これはどんなに別々になっているようでも、物語・小説の進行に連れて共通の頂点に向かうように工夫されている。すなわち、物語・小説の内容をなす細部の描写・会話等も、皆このプロットによって統一され、それぞれが全体と関連した意味をもつように組み立てられていなければならない。筋が複雑すぎるわりに物語が発展しなかったり、本筋に無関係の描写が長々と冗漫に続いたりする小説は、プロットも構築が不手ぎわであるか、部分部分の描かれ方が統一を欠いている場合である。

掲げたこの一文中で注目したいのは、村松が「最も簡単な構成形式」と例示する作品の構成についてである。ここで述べられる「はっきりと異った二つの事件を結び合わすことであって、これはどんなに別々になっているようでも、物語・小説の進行に連れて共通の頂点に向かうように工夫されている」という作品構成は、娯楽読み物としてのハードボイルド等の作品に多く見受けられるからである。因みに、ネオ・ハードボイルドの旗手として人気の高いロバート・B・パーカーの日本で翻訳されている十数作のスペンサー・シリーズ等は全てこの形式に則って書かれているほどである。

ところで、本稿で取り上げる「慧星の話」は、村松言うところの「最も簡単な構成形式」に則り書かれたのではないかと考えられるのである。「慧星の話」には「はっきりと異った二つの事件」は描かれないが、主人公ケメトスの「不吉な運命」を作品進行の軸とし、ケメトス

と祖父との相容れない「思念」が展開され、その進行の頂点において両者は相容れる「思念」となるように工夫されていると考えられるからである。

話の軸としての「不吉な運命」

――「慧星の話」の進行と展開（1）

では、「慧星の話」において、相容れない二人の人物の「思念」が、どのように「進行に連れて共通の頂点に向かうように工夫されている」のか、すなわち上述した作品構成が見て取れるのか、具体的に示していくことにしたいが、まずその前に、話の軸としての「不吉な運命」について見ておくことにしたい。

むかし、ギリシャの片田舎に、ケメトスといふ人がゐました。小さい時に両親を失つて、お祖父さんの手で育てられてゐましたが、非常な乱暴者で、近所の子供達と喧嘩をしたり、他人の果樹園に忍び込んで、林檎や無花果の実を盗んだり、野山を駆け廻つたりして、その日その日を遊び暮しました。

という書き出しで「慧星の話」は始められる。そして、作品の進行の軸として、乱暴者である主人公ケメトスの「不吉な運命」について、孫の行く末を心配するお祖父さんの口を通し、次のように語られるのである。

「ケメトスや、わしの言ふことをよく聞くがよい。・・・お前が生れる時に、わしは庭に出てゐた。空一面に星が輝いてる晩だつた。お前が無事に生れるやうにと心で祈りながら、ぼんやり空を見上げてゐた。すると、一際強く光つてる星がわしの眼にとまつた。暫くすると、その星がすーつと流れて、瞬くまに消え失せてしまつた。丁度その時に、家の中からお前の産声が聞えてきたのだ。」

「わしには、そのことがいつまでも忘れられない。星が流れるのは、殊に一際輝いてる星が流れるのは、悪い知らせなのだ。お前が生れる時に星が流れたのは、お前の運命がよくないといふ知らせだ。」

このような「不吉な運命」を軸として作品は進行し、孫の行く末を心配する「お祖父さんの思念」と、「不吉な運命」に触発される「ケメトスの思念」とは、全く交わらない別々のものとして展開していくことになるのである。

交わらない両者の思念

――「慧星の話」の進行と展開（2）

では、孫の行く末を心配する「お祖父さんの思念」と「不吉な運命」に触発される「ケメトスの思念」とは、交わらない別々のものとして、

どのように描かれているのであろうか。話の進行に従って両者を併記して示しておきたい。

○お祖父さんの

「よいか、ケメトスや、お前は余りよくない運命を荷つてるやうだから、それをよくなさうと努めなければいけない。さもないと、お前の終りは吃度悪い。分つたか、ケメトスや。」の心配に対し、

何とも答えないで、ただ頷き、「お祖父さんの様子がいつになく極めて真剣なのに、すつかり気圧され」てしまうのであるが、

○ケメトスは

「けれどケメトスには、お祖父さんの言つたことがよく分りませんでした。たゞ、自分の生れた時に星が流れたといふことだけが、はつきり頭にはひりました。そしてそのことを考へると、何だか嬉しいやうな力強いやうな気がしました。」となるのである。

この両者の思念は「不吉な運命」を挟んだものであるが、「何だか嬉しいやうな力強いやうな気がし」て、ケメトスは「ぴかつと光つて長い尾を引いて、空の奥へ消えてゆく流れ星」に憧れるようになる。そして、「自分もあんなに空が飛べたら・・・。」と考えるようになり、空を飛ぶのは容易ではないので、せめてもの心やりとして「高い所へ飛び上つたり飛び下りたり」する練習に勤しむのである。

その練習の成果として、「ケメトスは鳥の生れ変りだ」等と評判になり、次の展開として、遂にその土地の王様から招聘されることになり、いよいよ都へ出発することになるのであるが、やはり、両者の思念は交わることはない。

○お祖父さんは孫のケメトスを側に呼び、

「兎に角一つの技能に秀でるといふことは、それが不正なものでない限り、至つてよいことだ。それでわしは今迄、一生懸命になつているのを黙つて見てゐた。けれどよく考へると、わしはやはりお前の終りが気にかゝる。然し今更もう仕方はない。たゞ何事も控へ目にやるがよい。自分の力以上のことをしてはいけない。くれぐれも高慢な心を起さないようにね、ケメトスや。」という訓戒をするが、

○ケメトスは

都への出立に際し、お祖父さんの首に抱きつき、別れを悲しむお祖父さんの涙を拭いたりするのだが、その「思念」は、

「吃度名前を揚げると誓つて、勇んで都に上りました」と描かれるのである。

このように両者の「思念」は全く交わらないのである。それどころか、都に上り王様に飛び方の長に抱えられた「ケメトスは益々その技を磨くと共に」、「一生一代の晴業をして名を揚げたいと考へ」るよう

になるのである。

そして、いよいよ「一生一代の晴業」のチャンス到来となる。王様が諸国の王を招いた宴でご自慢のケメトスの技を披露することとなったからである。

これを良いチャンスとして、王様や人々が驚き止めるのも聞かず、宮殿の横の高さ三百尺の塔の頂から、ケメトスは夜、炬火を手に飛び下りることを決行するのである。

話のクライマックスと両者の思念の交わり

――「慧星の話」の進行と展開（3）

ケメトスが飛び下りる塔の下の場所には、毛氈が敷きつめられ、まわりには篝火が炊かれ、いよいよ話のクライマックスになるのである。

ケメトスは塔の頂に上つて、空の星に向つて長い間祈りを捧げました。お祖父さんから聞かされたことが、自分の運命が、今はつきりと分る気がしました。やがて彼は右手に炬火を持つて、塔の頂に現れました。それを見て四方から、雷のやうな喝采のどよめきが起りました。（中略）

ケメトスは、空の星に向つて最後にも一度心で祈り、それから、右手の炬火を三度輪に振つて、飛び下りる相図をしました。どつと歓呼の声が響いて、あとはしいんと静まり返りました。ケメトスは右手に高く炬火をかざしながら、大河の深い淵へ向つて力一杯飛びました。

人々は息を凝らして、塔から離れたケメトスを見つめました。所がケメトスの体は、塔の下の毛氈の上へ落ちて来ないで、あたかも羽が生えて飛ぶやうに、すつと空を掠めて、炬火の光りを長く尾に引きながら、程離れた大河の淵へ落ちこんで、そのまゝ見えなくなつてしまひました。余りに美事なのと余りに意外なので、人々は暫く茫然としてゐました。

というふうに話はクライマックスとなるのだが、夜空に飛んだケメトスは、それっきり、名前を残して消え去ってしまうのである。そして、土地の人々は以後、慧星を見ると「ケメトスが飛んでいる！」と言うようになったと話は結ばれるのである。

この話のクライマックスで注目したいのは、これまで、孫の行く末を心配する「お祖父さんの思念」と、「不吉な運命」に触発され奮発する「ケメトスの思念」とが、見事に交わり統一されているということである。

三百尺の塔から飛ぶクライマックスの部分において、空の星に祈りを捧げた折り、

○ケメトスの「思念」はここに至って、

「お祖父さんから聞かされたことが、自分の運命が、今はつきりと分る気がしました」と描かれ、そして、「炬火の光りを長く

尾に引きながら」夜空に消え去るのである。

これに対し、孫のケメトスが夜空に飛び消え去った知らせを受け、

○お祖父さんの「思念」はただゝゞ、

「一言も口をきかずに、たゞ悲しげに頷きました」と対応するのである。

掲げた併記のように、交わらない別々の両者の「思念」は交わり、話の進行の軸である「不吉な運命」は結ばれるのである。

童話における主題とは

前節までに縷々示してきたように、「慧星の話」は、村松定孝の言説を引き紹介した物語などに使われる「最も簡単な構成形式」を作品構成としているのである。すなわち、「どんなに別々になっているようで」あろうが、話の「進行に連れて共通の頂点に向かうように工夫されている」のである。

そして、このような作品構成に裏打ちされ、冒頭で紹介した続橋達雄の「慧星の話」の秀逸した批評が示す作品世界があるのである。

では、本作品の主題はどうであろうか。続橋が評する作品世界を広義の主題してもよいが、本作品の狭義の主題はどうであろうか、作品の構成と共に少しく言及しておきたいところである。

ここで言う主題とはもちろん、作品の中心となる思想ということになるであろう。ただ、童話作品においては、小説などと違い、えてして意義ある明確な主題を示さない場合が多くあるということをも念頭においておきたい。

ところで、ここで取り上げ考察してきた「慧星の話」をも収録しているのであるが、『コーカサスの鷲・豊島与志雄童話全集　第3巻』（八雲書店　昭和23・12）の「あとがき」中で、豊島は「子供の心が持ってる大切なものの一つ」である「夢」が収録の作品には盛り込まれていると述べている。では、この豊島自身の言に従い、「慧星の話」中に盛り込まれている「夢」とはどのようであろうか。

それから彼は、晩になるとよく星を眺めました。殊に、屋根の上にあがつて、林檎やなんかをかぢりながら、星を見るのが愉快でした。ぴかつと光つて長い尾を引いて、空の奥へ消えてゆく流れ星を見付けると、喜んで飛び上がりました。

「自分もあんなに空が飛べたら・・・。」と彼は考えました。

作中に盛り込まれている「夢」とは、掲げた一文にあるように、子どもの多くが夢見るであろう流れ星（＝慧星）のように夜空を飛びたいという思いと言わねばならない。お祖父さんから聞かされたケメトス自身の「不吉な運命」に触発された「夢」であるが。

冒頭で紹介した続橋達雄の「慧星の話」への作品評の言説である「積極的に自分の生命を生ききって、はればれと美しく消えていった姿」を読み取り、読者に「現実社会から解放されてひろやかな世界へと飛

び立つよろこびさえ感じ」させることが本作品の広義の主題とするならば、子どもの多くが夢見るであろう、上述の「流れ星（＝慧星）のように夜空を飛びたい」という思いと実践とが本作品の狭義の主題でなかろうか。

×　×　×　×

冒頭で紹介したように、「慧星の話」への作品評は続橋達雄の要を得た作品評に尽きるであろうが、以上に示し述べてきたような、続橋が評する作品世界を裏打ちする、特異な作品構成について、大いに留意しておきたいことである。また、続橋が評する作品世界を広義の本作品の主題とし、併せて「流れ星（＝慧星）のように夜空を飛びたい」という作品に盛り込まれた「夢」を狭義の主題として留意することにしておきたい。

作品の構想・構成などに前衛的である豊島である。主題についての留意はもちろんであるが、特に本作品の構成についての留意は「慧星の話」の読みと理解をよりいっそう深める為に必要不可欠と考えるしだいである。

【付記　本稿は『豊島与志雄童話選集・郷土篇』（双文社出版　昭和57・4）所載の「慧星の話」をテキストとした。